

柳宗悦の想像力について
—朝鮮と日本の発見をめぐる—

On the Imagination of Mr. Soetsu Yanagi,
around the Discovery of Korea and Japan

中江 桂子*
Keiko Nakae

Abstract

In the era when Mr. Soetsu Yanagi lived, Japan was in an era of growth and war from the end of the Meiji era to the Showa era. But the two spiritual fathers - Mr. Kaishu Katsu and Mr. Jigoro Kanou - brought up Soetsu Yanagi in a very liberal environment. Mr. Yanagi did not believe that reason and logical way led to human understanding, but rather deprived human freedom. He thought that what is needed to insight human freedom, human diversity and discordant world is the imagination beyond reason. But the imagination is not universal either. For this reason, Yanagi's central problem was how to gain imagination and a deeper understanding on the world.

Soetsu was inspired by the research of William Blake and the stone Buddha temple in Gyeongju-Korea. And the next interest of him is Mokujiki Buddha in Japan. It led to the discovery of Korea and Japan. He will make imagination work for various subjects. It was also a work to confirm each individuality and empathy while comparing various things. There was a round-trip movement of imagination towards mutual understanding. This has become a strategic way of Yanagi to understand the diverse world.

凡例：『柳宗悦全集』筑摩書房（1980-1983）からの本文中の引用については、(柳, 作品の初出年: 全集の巻数: 該当頁) の表記とする。

I. ふたりの父——勝海舟と嘉納治五郎

柳宗悦の思想風景を概観するに、彼の生まれ育った家族環境をおさえておくべきであろう。柳宗悦はわずか2歳のときに父である柳猶悦を喪った。このため、宗悦にとって父の代わりであったのは、勝海舟と嘉納治五郎、このふたりだった。

* 明治大学文学部教授, Professor, Department of Literature, School of Arts and Letters, Meiji University.
Email: nakae@meiji.ac.jp

父、柳猶悦は、幕末に津藩から長崎海軍伝習所へ派遣され、オランダ人教師のもとで海図・測量術・航海術などを身につけた人物であった。新政府では海軍創設にかかわり、海軍部水路局の初代局長に就任し、水路学会や大日本水産学会などの創設にもかかわった。しかし猶悦は単なる技術屋というわけではなかった。のちに柳宗悦は父のことを次のように書いている。「彼を学者としし又実践者となすは彼の反面にして全般にあらず。吾人は第三に彼が趣味の人なりを忘る能はず。彼は文なき武人にあらず、又味なき学徒にあらず。」(柳1917: 1:417)。その通り、猶悦は書画や茶道を愛し、歌人でもあり、そうかと思えば各地の料理を学び、料理本まで出している。貝殻の蒐集をもしていた猶悦は、真珠の養殖を試み、これを御木本幸吉に委託して成功したことで知られる(水尾2004: 22-24)。要するに猶悦は、学術と実践を区別せず、みずからの好奇心にこだわる生き方を生きた。この生き方は共に生きた時間がわずかだったとはいえ、宗悦にそのまま受け継がれた生き方であったように思われる。宗悦の父への深い尊敬がここに表れている。さて、猶悦の人脈は多岐にわたり、勝海舟は猶悦にとって先達であるとともに盟友でもあった。

柳宗悦の母、勝子は、1672年から続く蔵元、「菊政宗」で知られる灘の酒造業嘉納家に生まれた。勝子の父である嘉納治郎作希芝は嘉納家の分家筋で、大阪で幕府の廻船御用を務めていたが、1867年にはじめて西洋式の船による江戸までの航路をひらき、明治になると海軍官吏となった。希芝は勝海舟から支援を得る一方、勝設計の和田岬砲台の建造にも協力している。希芝の子の勝子の名も、ちょうど勝が嘉納家に来訪時に生まれたということで、命名されたという。このようなきさつからもわかるように柳、嘉納、両家と深い交流のあった勝海舟は、柳猶悦と嘉納勝子の間をも仲立ちしたのである。このように親しい関係を結んでいた勝海舟にとって、猶悦の早すぎる死はいかばかりの衝撃であったろうか。猶悦の墓碑は勝海舟の筆によるものである。

勝海舟は明治維新後の日本の政策に参画した位置づけにあって、日清戦争に公然と反対をし、足尾銅山鉍毒事件の際には田中正造を一貫して支援した人物だった。勝は、党派を嫌い多様性を愛した自由人だったのである。「なに、誰を味方にしようなどというから、間違うのだ。みんな敵がいい。敵がないと事が出来ぬ。国家というものは、みんながワイワイ反対して、それでいいのだ。…内で喧嘩をしているから分からないのだ。一つ、外から見ても御覧な。じきに分かってしまうよ。」(勝1983: 61)という発言をみても、よくわかる。

勝子の子供は三男三女あった(次女は夭折)が、猶悦の早すぎる死のあと、一家は実業家として渡米していた次兄をスペイン風邪で失った。続けて、猶悦の職業を最もよく受け継ぎ、遠洋航海などにも出る一方で漁船の造船事業に乗り出し、嘉納塾で柔道を修め指導にも携わっていた長兄をも、関東大震災の被災により失った。母勝子と宗悦、宗悦の姉直枝子と妹千恵子。急に心細くなったこの家族を、嘉納治五郎は父親代わりとしてよく面倒をみていたという。嘉納はヨーロッパへの長期の視察から帰国した1891年からしばらくの間、勝子の家に身を寄せて一緒に生活していた。この時期、治五郎は柳家で須磨子と結婚式を挙げている。また嘉納の我孫子の別荘にはたびたび柳家の子供たちは遊びに行っていた。柳宗悦結婚後の新居は我孫子の嘉納の別荘のとなり用に用意したりと、日常の生活のなかでの深い親交があった。

嘉納治五郎は、講道館設立やIOCにおける活動など多彩な活動を通じて「精力善用、自他共栄」の理想を掲げており、日本を絶対的権威と考える道徳観は毛頭もちあわせていない。たとえば嘉納は、第一次世界大戦後の欧州を旅したのち、宗悦と暮らしていた頃かと思われる時期に、以下のように語っている。「道徳を説くにはある一派の学説とか、一種の信仰とかいうものによってこれを説くということは、その学説、その信仰を有する人にはよいが、他の人々を納得せし

むることは、到底不可能のことである。(中略)・そこで他人よかれと考へ、これを行ひつつ己をもよくし、己をよくしつつ他の利をはかる。すなわち自他共栄の途に出なければならぬ」(嘉納1988:142-143)。といい、他を顧みず自分の繁栄のみに関心を向ける風潮を憂いている。また、彼のいう精力善用とは、体育にくわえて智育・徳育の3つの要素をどれも突出させることなく釣り合いよく育てることが個人の力の充実と自己完成につながる、という考え方であり、これを「衣食住、其の他社会全般にも応用」することがすなわち「自他共栄」を実現する一歩であることを謳っている。(嘉納1976:384-385)

柳宗悦のこのような生活環境は、同時代の富国強兵の声高い日本のなかでは、特にリベラルな空気があったといえるだろう。

さて、柳と朝鮮を含むアジアとの関係の端緒のひとつは、柳家で結婚式をあげた嘉納治五郎の妻、須磨子の父である竹添進一郎であった。竹添は、勝海舟とは長年にわたり深い信頼関係により結ばれた仲であり、新政府では外交を担う役割を果たしていたが、1882年に朝鮮日本公使となり、やがては甲申政変を謀ることになる人物である(韓2008:196)。また、宗悦の妹の千枝子が朝鮮総督府事務官今村武志に嫁ぎ、1921年に没するまで10年ほど朝鮮での生活をしている。このような朝鮮統治にかかわる人間たちとの親密な関係は、のちに柳宗悦の朝鮮をめぐる論説にたいする大きな批判を生む根拠になってきた。柳の言うことはすべて朝鮮の文化支配をめざす政治的発言であるとの批判である。しかし、彼らの出自やその行動や思想を振り返れば、これが日本総督府政府の統治思想とほぼイコールであると結論付けることは、それこそがある種の紋切り型の陥穽に陥っているといえるのではないだろうか。これについては後述することにしてしよう。

いずれにせよ、勝や嘉納をはじめとする人びとに幼いころから薫陶をうけていた柳宗悦は、他なるものを尊重する姿勢とその限界を知り、他の立場から己を見る方法を自然のうちに身に付けていたであろうことは、想像に難くない。

II. 不調和なる世界と方法としての「直観」

前述のような生活環境で育った柳宗悦は、若干12歳の学習院中等科のころから、のちの『白樺』同人たちとの交友をはじめることになる。ちなみに柳は長与善郎とともに最も若い白樺派同人であった。

白樺派とその人びととは何か、について一言でまとめるのは難しい。というのも、そこには、文学者、美術家、思想家など多様なジャンルの人びとの集まりであり、雑誌『白樺』も、その記事において一貫した主義や立場がある、とはいえないからである。明治43年(1910)4月から大正12年(1923)年8月まで刊行されたこの文芸雑誌は、「和して同ぜず」という武者小路実篤の言葉を原点とし、それぞれの人間がそれぞれの理由で集い、その成果や評価もそれぞれの胸の中で理解されていたように思われる。一般的には、いち早く『白樺』誌上でロダンや後期印象派の紹介をしたことなど、西洋文化の日本における導入に一役買った、という理解はあるが、これは白樺派の一つの語りであるにすぎない。(中江2016:39-40)

自分たちはただいたづらに西洋人をおかつぐのではない。西洋の芸術家を紹介するのではない。何等かの意味で吾人の個性を生かしてくれた、又くれつつあるものを紹介してゐるのである。(中略)自分たちは内心の要求に従って進んできた点に於いて今の日本の誰にもまけない心算である。従って自分達はジャンプはできなかった。キュビストや未来派まだ自分達にはしつ

くり来ない。だから今の所まだ本物か嘘物かはっきりしない。マチスはこの頃になってしっくり来た。もう誰が何と云ってもマチスの真の芸術家であることは疑いへない。(武者小路 1912 : 56)

武者小路のこの言葉に端的に表されているのは、『白樺』が単なる西洋文化紹介のためメディアではなかったことだ。『白樺』は、西洋 (= 他なるもの) と日本に生きる一人ひとりの個性との、鮮やかな対話そのものであったことである。対話して本物と確信するものについては、その個性のもつ強い感受性の裏付けのもと、論じられ、結果紹介されていった。まだ西欧でさえ評価の定まらなかった後期印象派を、いち早く日本に受容する場となったのも、白樺派が西欧文化を扱うにあたって、世評などよりも自らの感性のアンテナを信じたから可能になったのだった。そしてその理解とは、きわめて白樺的 (日本的) 理解であったといえるだろう。「世に「白樺的」といわれるものが、「自己を生かそう」とするこのような姿勢にあったことは否定できない」(高階 1993 : 326)。

このことをふまえ白樺派を特徴づけるものをあえて挙げるなら、「他者」の文化と「自己」の文化的対話を通じて、他なるものの評価やその尊重を形にすると同時に、自己すなわち自分の文化に回帰し、自らを理解していくというその方法であった。前述したように、勝海舟や嘉納治五郎の薫陶を直接受けた若き柳が、この白樺派の姿勢と方法をあつという間に吸収したであろうことは確かであり、白樺派同人という知的な仲間を得たことを、心強く感じたであろうことも想像できる。

白樺派の活動を始めたころの柳の関心は、自然と自然科学、そして人間の心理にわたる、壮大な知的世界であった。彼が帝国大学在学中に、最初の出版である『科学と人生』(柳 1911) が公刊されたが、これは現在で言えば知識社会学の業績である。「宗教と道德の権威が地に落ちたる今日、思想に飢えたる吾等にとりて大なる力を有するものは科学である。もし吾等理知の文明に育ちたる民に再び人生の神秘を明らかに語りえるものがあるならば、そは古き信仰に非ずして新しき科学である」(柳 1911 : 1 : 8) という言葉から説き起こされていく。しかしこれは、産業化と合理化によって文明国を追いかけようという当時国家的に推奨された科学信仰に追随しているものではない。むしろ柳は、時代の趨勢とは異なる、科学と人間とのもうひとつの必然的な関係を著しており、その最も重要な特徴は、生命にはさまざまな不調和不合理があることが実に科学的に論じられていることであった。彼は動物、植物、ひいては細菌までを扱いながら生命に関する科学的叙述をし、「吾々が生物界を見るとき個性が全体のために犠牲になっている事実をしばしば見る」(柳 1911 : 1 : 128) という。部分の合理性を貫こうとして全体が不調和を引き起こし不合理的結果をもたらす状況、あるいは部分としては不合理な状態が全体としては合理的な結果をもたらすことなどが、生命の様々な実態のなかに観察できることを、綿密な実例をともない論じている。言い換えれば、生命それぞれのなかで、個体/個性と全体/社会との調和がどのように成しえるかについて、それぞれの生命が部分の個性を超えて全体の均衡をつくりだすさまについて、柳は関心を向けているのである。さらに同様の問題として、人間をめぐる世界に内在する数々の不調和や葛藤を、どのように全体として調和に至らしめることができるか、という問題関心のもと叙述は進んでいる。いわば、自他共栄の科学とでもいえるだろう。「社会学はまず生物学を学ぶべきである。生物学は進化が個性の発展を意味し、かくてついに個人の犠牲を要せざるほどに社会が進むべきことを告げている」(柳 1911 : 1 : 131)。そして、この重大な問題を人間について論じようとするとき、柳は、哲学や芸術や文学を排除することはない。

柳はこの著作の直後の著作のなかでも、以下のように述べる。

吾々は自然の現象に二秩序を存する事を是認せざるを得ない。一つは物質の世界であって、一つは生命の世界である。第一においては一切の無機界が之を代表し、完全な理科学的機械論の成立をそこに見る事ができる。換言すれば科学法則の世界である。第二は、生命を核として存在する有機體の世界、即一切の生物界はこれを代表する。茲に純粹科学は其の力を生氣科学に譲らなければならない。茲に吾々は所謂生氣活動の世界に入るのである。然もこの生命の世界に於いては科学は最も密接に哲学に近づくのである。(柳1913:1:316)

有機體の世界の生氣活動、生命にかかわる活動に接近する生氣科学は、どのように可能なのか、という問いに、抽象化や分析や理論に対し柳は強い警戒心をもつ。それらは生命を細分化し、不調和と葛藤を際立たせることには役立つが、生命世界の把握には役立たない。

批評家が抽象し分析して之に理論を加えるとき、具象的な統一的な生命そのものの真意から益々離れてゆく。指名の活動は統體的であって、単純な部分の數理的集合ではない。・・(中略)・・抽象的分析の総和が決して統體ある生命を生まない事実を、吾々は又屢々歴史土に見出すことが出来る。特に芸術史、宗教史中、萎靡の時代は凡て人心が分析を追うの罪に依っている。芸術は特に生命の神秘的な力の発現であるから、芸術に抽象的な理論が入ると共に著しく其生命は具象性を傷つけて衰頹の色を呈してくる。(柳1913:1:322)。

ここにあらわれる統體と分析との関係を、柳は、同時代の絵画史に触れながら、後期印象派と新印象派との対比で説明する。後期印象派は生命と自然からの直感を出発点として生命の希望への想像力を掻き立てるのに対して、新印象派は、光と影を追求した印象派の趣旨をさらに追いかけ、波動と光のスペクトラムを分析して絵画に持ち込んだ(スーラらの点描など)。結局、新印象派は、理論と抽象的思索が入り込んでしまうことによって、「具象的生命の眞景からは甚だしく遠ざかっている」(柳1913:1:323)。

ここで柳の世界観を整理しておこう。まず第1には、この多様性のある世界においては、さまざまな矛盾や対立があることはむしろ自然なことだ。しかしこの矛盾や対立は、今の社会では互いを排除しあい終わりのない争いになりがちだが、本来は互いに必要とされ補完しあう関係であるはずなのである。これを理解し、矛盾する双方を含み総体として判断することこそが、自然の懐の眞理に近づくことである、ということである。第2には、この総体としての理解は、理性や知識に拘束された状態では到達することはできないことが認識されていることである。そして第3のポイントとしては、自然への想像力を自らの世界のなかで働かせ、極めて具体的に親しい経験を経由してこそ、総体としての把握に至ることが出来ることである。嘉納治五郎が「精力善用」という理念を示すとき、人間の智育だけを突出されることへの懸念をもとに、それと同時に体育(身体の感覚の養育)と徳育(共同性の感覚の育成)、この三つの力を人間のなかにバランスよく結実させることを意図していた。柳のいう「総体としての理解」は、直観ないし直覚という概念で示されるが、これもまた人間のなかに自然に備わるさまざまな知覚の総合的な力を意味していると考えてよい。

ここに表明される生命観・世界観は、柳25歳の重厚な単著『キリアム・ブレーク』(1914b)として、総括的かつ具体的に論じられることになる。柳はウィリアム・ブレークの芸術と哲学を砂漠に水を撒くごとく吸収したに違いない。ブレークを通じて自らの世界との接し方を深めつつ自己を確

認し、やがてはブレイクを論じながら同時に自分の哲学を詳細に披露することとなったのである。以下の引用のなかの「彼」とはブレイクのことであるが、これを柳本人に置き換えたとしても問題は無い。

彼は理性を否定したのではない。……彼が欲したのは理性に枯死しない人間の活きた生命だった。「知識の樹」に悩む人類を「生命の樹」に喜ばす事であった。彼の愛したのは理知に自己を埋没させることではない。直観による個性の充実であった。性格の分離ではない、生命の有機的総合である。真理の抽象的理解ではない、その具象的認識である。(柳1914b: 4: 326)

理性の範囲を超えた想像の世界を認め得ない思想は彼の堪え得ない処だった。詩人であり画家であった彼は直接経験の具象的事実を一日も忘れることが出来なかった。彼が毛のしたものはこの経験の自由を破る凡ての知的理性であった。(柳1914b: 4: 319)

直観とは実在の直接経験である。一切の抽象差別を離れて個物の真正に身自ら触れてそのもののうちに自ら生きる事である。思惟の作用は概念に止まって何ら実在の真相をも画いてはいない。真理の獲得はいつも直接経験にある。経験を離れては一切のものは落莫である。(柳1914b: 4: 321)

柳はそののち生涯にわたって「直観」ないし「直覚」という言葉を鍵概念として使用する。これは日常語では、他者には説明できないカリスマ、として理解されがちであるが、柳にとっては上記のような、矛盾や葛藤のひしめく世界を把握する哲学的方法のことであった。また論理性や理性が、直観という全人格的な把握力の働きを邪魔することを、柳は憎んだ。

Ⅲ. 手賀沼湖畔の思索—そして朝鮮の発見

柳は『キリウム・ブレイク』を刊行した1914年に東京を離れ、我孫子の手賀沼のほとり、嘉納治五郎の別荘の隣の敷地で新しい生活を始めた。我孫子での生活は1921年に明治大学や女子英学塾での職につくまでの7年ほどの期間であった。この間、我孫子の手賀沼周辺は、白樺派の武者小路実篤や志賀直哉などの著名な文人たちが柳邸の近くに移り住み、雑誌『白樺』に触発された人々の来訪も多く、いわば白樺派村のような土地になっている。たった7年間ではあったが、ここでの豊かな自然のなかでの時間は、柳にとっても白樺派にとっても大きな意味をもち、後世の活動に影響を与えたといえよう。とくに柳にとっては、いままでの東京生活とは異なるインスピレーションを感得することになった。

茲に来てから自然が親しく生活の一部を形造る様になつた。自然の移推は又内心の移推になつた。自分にとって『自然は絶えず生きてゐる』という事実は詩人の言葉から、自然それ自身の言葉に迄移されていつた。(中略)柔らかな木の芽にも、虫の運動にも、亦その声にも吾々は自然の賛歌を読む事ができる (柳1915: 1: 341)。

このころの手賀沼湖畔はまだ石油ランプの生活で、夜ともなると深い闇と静けさに覆われていたという (柳宗玄1981: 2: 538)。この自然環境のなかでの生活により与えられた深い内省によって、彼の宗教哲学や認識論への思索は深まり、形を整えていった (柳1975: 24)。現在柳研究の

定本ともいえる筑摩書房刊の柳宗悦全集の第2巻には、宗教哲学周辺の論考が集成されているが、その大部分は我孫子時代に書かれたものである。湖畔の生活のなかで、彼はこれまでブレイク研究を核として育てていた哲学的世界観を、自由闊達に動き回る精神によって洋の東西の数々の思想を渉獵したうえでより大きく育てることとなった。

柳は宗教的奇蹟を否定するスピノザやヒュームらの思想を吟味してその矛盾を明らかにするとともに、立場や主義によって相対と争いを展開するこの時代を、突出してしまった理知が他を非難する時代であると説く（柳1921：2：402）。しかし、「生命に飢える人生は具象的事実を慕って冷静な理知の作用を除こうとする。理性は吾々に事実の明晰な個別性を与へても、活きた実存の経験を産み得ない」（柳1975：62）。柳は、多様性の相対と争いの世界は貧しいといい、世界をそのままに理解することを「即如」という概念であらわす。そして下記の引用のように、直観によるものの見方、生命の有機的総合を把握すること、という精神的な活動は、芸術の価値を認識し、その価値を具体的に育成していくことになる。

立場をすら介在せぬ理解が始めて即如の真実な理解である。かかる意味に於て単に夢幻のように思はれる芸術は、実証の科学よりもはるかに鋭い即如の理解である。芸術とは或る規矩によるものの見方ではない。従って定義であるよりも暗示である。思惟以前の象徴の境が芸術の分野である。芸術は主義を脚下に踏み乍ら、何等人為なく加工なく自然の奥底に迫るのである。捉え得た美がよく永遠であり得るのは即如を直下に暗示するからである。（柳1919a：2：168）

深い宗教的世界の思索にはまりながら、しかし好奇心溢れ活動の人であった柳は、宗教的思索の世界にのみとどまることがなかった。直観とは、人間の感情によって体験される認識活動であるが、この体験について柳は、近代的価値観からの攻撃を予想して哲学的な擁護を展開する。たとえば感情は主観的なものであり、理性こそ客観的なものであるという近代意識を、先入観であるとしてこれを逆転していく。

感情とはいかなるものであろうか。果たしてそれは主観に止まるとの意であらうか。何等の普遍的根底を持たぬ感情であらうか。感情とは、ものを前に於いての観察ではない、感情に於いてもものと余とは一つに交わるのである。ものに対するときに理知があり、ものに即するときに感情がある。（中略）ものに心が動くとは、ものに心が入るとの意であらう。・・・心はものに生き、ものは心に活きるのである。・・・感情こそ一としての世界（分類と相対を超えた世界（筆者付加））をそのままに味わう道ではあるまいか。（中略）感情は実は一の世界においては寧ろ客観的な感情ではないか。一を一としてそのままに味わう意に於いて客観的感情ではないか。一なる世界が許し得る普遍の世界であるなら、感情こそ普遍の美の送り手ではないか。（柳1921：2：451-452）。

柳は宗教的感情を抽象的な観念の世界のこととして放置することはない。それは、感情の持ち主の生きた体験をとおしてこそ、具体的に生きる哲学となるのである。「真理が最も恐ろしい権威を持つ時は彼が生理的背景を持つ時にある。思想が血と肉とを經由しないとき、彼にはただ貧しい思索の遊戯がある」（柳1914b：4：303）。きわめて抽象的な精神世界と具体的に感情が働く生活世界とは、しばしば別個のこととして論じられやすいが、柳はこれを密接に関連する一体のものとして総合的に考える。これは柳哲学の最大の特徴だといってもよい。この密接な関連性は、

柳においては、我孫子手賀沼時代に明確に自覚され、哲学の中で発展させられていく。それは、最も深い宗教的思索の生活のなか、これを具現化する出会いがここにあったことも重要であろう。柳は手賀沼周辺の自然のなかで、自然そのものもつ力とそのあらわれがいかにか豊かか、それが人間に教える哲学的世界を身体にしみ込ませていたに違いない。

そのようなところに浅川伯教がやってきたのである。

その手賀沼の畔で柳は朝鮮陶磁との運命的な出会いをする。彼は1914年我孫子の自宅で浅川伯教の訪問をうけた。朝鮮京城府西大門公立尋常小学校の教諭であり、彫刻を学んでいた浅川伯教は、ロダンの彫刻を預かっている柳宗悦のもとを訪れたが、その際に土産として李朝の染付秋草文面取壺を持参したのである。

それは磁器に現わされた型状美だ。之は全く朝鮮の陶器から暗示を得た新しい驚愕だ。嘗て何等の注意も払はず且つ些細事と見做して寧ろ軽んじた陶器等の型状が、自分が自然を見る大きな端緒になろうとは思いだにしなかつた。『事物の型状は無限だ』と云ふ一個の命題が明瞭に自分に意識された時此の単純な心理は自分にとって新しい神秘になった。その冷な土器に人間の温み、高貴、荘厳を読み得ようとは昨日まで夢見だにしなかつた。(柳1914a:1:334)

もとより柳は学生時代から朝鮮の白磁に心惹かれており、また博覧会で李朝白磁に感銘を受けていたリーチとの出会いがすでにあつた。とはいえ、我孫子の地でこの壺と出会い、そこに働いた彼の直感、朝鮮文化への強い誘いを柳のなかに呼び起こし、特別の経験となった。このあとの柳の初めての朝鮮訪問は1916年であつた。このとき、浅川伯教、巧兄弟の案内によって窯場や古陶を訪ね歩く楽しさに浸ったことが、そののちの民芸運動の活動の基礎を作つたことは言うまでもない。しかしこの旅のなかで深く柳の胸に刻まれたもう一つの重要な経験は、慶州の石仏寺石窟庵の訪問であつた。「古代の人は何の科学をすら持たなかつたが、石仏寺のごとき建築に於て、自然の理法を驚くべき美に結びつけたのである」(柳1919:6:127)という言葉にみてとれるように、これは、朝鮮における自然と朝鮮の芸術との必然的な関係とその美についての柳の理解を、確信に高める決定的な体験だったともいえるだろう。

余は実に之程の内なる深さと神秘とを示し得た仏教の芸術を他に知る場合がない。かかるものを作り得た作者の宗教的経験に対して余は限りない敬畏の状を禁じ得ないのである。嘗て是程の僅かな線と単一な形とに於て、是程の複雑な美の深さを示し得たものが何處にあらうか。(中略)是等の宗教の力は悉く朝鮮固有の美を通して、残りなく示されている。(柳1919:6:134)

柳の石窟庵にかんする叙述は実際に訪問した年ではなく1919年まで待たなければならず、それまでほとんど知られていなかったこの芸術作品の紹介のために、記録的なものとなっている(柳1919b:6:110)。とはいえ、手賀沼の畔で思索した生命観と芸術との不可分の関係は、朝鮮の自然と石窟庵の仏像群に具体的に示されていた。すなわち「一切の抽象差別を離れて、個物の真正に身自ら触れてそのもののうちに生きる」(柳1914b:4:321)ことこそ、石窟庵の体験そのものだったのである。これは自然と歴史の結実としてたちあらわれる芸術の具象的生命との出会いとして、柳の身体に深く刻印されることとなった。「自然と歴史はいつも芸術の生みの母であつた。自然はその民族の芸術に取るべき方向を定め歴史は踏むべき経路を与えた。朝鮮芸術の特質をその根

底に於て捕えようとするなら、吾々はその自然に帰しその歴史に入らねばならぬ」(柳1922b:6:93)。

この柳の最初の朝鮮半島訪問のあと、日本と朝鮮に関する情勢は次第に厳しいものになる。次第に朝鮮半島内で日本の支配に対する抵抗が静かに広がり、ついに三・一独立運動となった。この事件が柳にもたらした衝撃はいかばかりであったろう。崇高な芸術を生み出す隣人、その尊厳を武力によって傷つけた事件に接し、柳の筆ははやるように朝鮮に向けられていった。三・一独立運動の事件直後、読売新聞に掲載した「朝鮮人を想ふ」は1919年5月のことであった。ここでは、優れた芸術作品を生み出した朝鮮民族にたいする柳の崇敬と愛情が著わされており、これを武力で踏みしめる日本政府への激しい怒りが込められていた。三・一運動後に許可され1920年4月に発刊した朝鮮の新聞『東亜日報』に「朝鮮人を想ふ」の朝鮮語訳が掲載されたのは、発刊直後の4月12日であった。本論文の直前の引用で紹介した石窟庵に関する論考「石仏寺の彫刻について」も、三・一運動事件直後の6月に発表されたものである。さらに柳は「朝鮮の友に贈る書」を著し、朝鮮の友人への書簡形式をとって日本の暴政について詫び、朝鮮の芸術への崇敬を重ねて公に示した。「贈る書」は、1920年4月10日に我孫子で執筆したものだが、即座にこの論考の朝鮮語訳は『東亜日報』に4月19日20日の2日にわたり連載された。この論考は、甚だしい検閲を経て修正したにもかかわらず、2回で発表を禁止されてしまう。しかしその後6月16日の英字新聞Japan Advertiserにその抄訳が掲載され、広く共感を得た。この文章の日本国内での発表は『改造』の6月号であり、朝鮮での最初の印刷の後だった。さて、これらを手始めとして柳の身を賭した朝鮮擁護の論文のほとんどは、ここからの5年間にほぼ集中している。そして柳の朝鮮訪問も1920年から急速に頻度を増す。20年にはアルト歌手として世界的に活動していた妻兼子の音楽会をソウルで初めて開催し、喝采を集めている。1921年などは3回ほどの行き来をしているが、これを通じて、朝鮮と日本、双方の地で、朝鮮美術に関する展覧会をたびたび企画開催しており、いずれも大盛況であった。東京神田ではじめて開催した「朝鮮民族美術展覧会」は1921年5月であったが、これは「朝鮮民族美術」という言葉が使われた史土初の展覧会であった。また、柳の功績の一つが1924年に「朝鮮民族美術館」をソウルに設立したことであったのも忘れてはならない。

こうしてみると、彼の朝鮮と朝鮮美術に関する活動は、美術の領域を超えた深い射程を持つことがわかる。政治は立場や主義に振り回されざるをえず、その権力は結果的に暴力としてあらわれてしまう。これに私たち民衆が屈するのでないなら、私たちは立場や主義を超えた理解を互いに目指さなければならない、と柳は考えていた。柳の朝鮮擁護の一連の発言は、日本政府への批判であるとか、逆に日本の狡猾な文化政策の形であるとか、そのような批判が渦巻くことになるのだが、それらもまた立場や主義の葛藤する場、そのものであろう。当然ながら当時の批判や意見について柳自身も想定していたであろう。しかし、だからといって、これを上段から眺めて行動を起こさないことは柳にはできなかつた。現実の政治と具体的な生活を抜きに、私たちは生きられないからだ。しかし自身の政治的とも思える活動の成否には、彼はあまり関心を持たなかつた。主義や立場を戦わせる世界、それ自体を柳は超えたいと願い、そして、民衆の素朴な感性にその希望を見出したのだといえるだろう。「立場なき理解とは概念なき理解である。思惟を容れぬ味識 (Knowledge of Acquaintance) である。直観とはかかることを意味するのであろう。即如は如何なる立場による理解をも許さぬ内容である」(柳1919a:2:169)とし、またこの即如の理解への信頼すべき道標こそが芸術であった。彼の世界観は、ここでも再確認され実行されるのである。

IV. 木喰仏への想像力—あるいは日本へのまなざし

朝鮮と日本にわたる活動に忙しかった只中の1923年、柳は浅川巧に案内され甲府の池田村の小宮山氏のもとへ朝鮮陶磁器を見に行く途中、木喰仏に出会う。

二體の仏が暗い光を斜めから受けて、庫の前に置かれてあった。その前を過ぎようとしたとき、私が投げた一瞥は、思いがけなくも微笑む彼らに迎えられた。その刹那私はその価値が尋常でないことを直覚した。そうして即座にその微笑みのなかで、上人と私の交わりは開始せられた。心惹かれるままに私は驚きの世界へと入っていった（柳1924c：7：7）。

木喰仏との出会いのこの描写は、慶州石仏寺石窟庵の石仏に啓示のような出会いをした際の記述と状況（柳1919：6：110）がよく似ており、柳にとって、この二つは朝鮮と日本という違いこそあれ、ほとんど同じ体験であったことが推察できる。いずれも彼は一瞥でその芸術の美しさと崇高さを直観するのである。少なくとも柳の想像世界のなかに限っていえば、切り立った岩山の国土である朝鮮の自然と人々の歴史から立ちあらわれた芸術のひとつが石窟庵の石仏であるとすれば、森林が包みこむ日本の自然と人々の歴史から生み落とされた芸術のひとつは、間違いなく木喰仏であったといってもよいだろう。石窟庵での体験が木喰仏への直観へとよく導いた、という想像を否定することができない。ちょうど、朝鮮民族美術館の建設がほぼ一段落しつつあるタイミングだったこともあり、関東大震災被災後に京都に移り住むため東京での大学の仕事をすべて辞したこともあり、柳は1924年については時間のほぼすべてを木喰上人研究に費やすことになった。時間のすべてを研究に、とは、なんと自由で余裕があるのだろうか、現代の私たちは感じるかもしれない。しかし実際は逆で、柳によれば、心があまりに木喰上人に専有され、「余裕なき仕事にとりかかったのです、（このため）一切の仕事を放棄した」（柳1925a：7：260-261）のだという。

ところが研究は苦難を極めることになる。いかなる仏教辞典にも郷土史資料にも、木喰上人は記録されていないのである。柳はやむをえず上人の故郷である甲州に残された民間仏とお堂に残された古い文書をひとつひとつ訪ね歩き、その足跡を確認する作業にいそしんだ。そのうち、ある農家に放置されていた箱のなかに、上人の資料、「納経帳」「御宿帳」などを含む資料を発見した（柳1925a：7：265）。そこから木喰上人の研究は本格的に始動することになった。柳が明らかにしたところによると、木喰上人は14歳のとき出奔し、放浪と祈りの仏路を歩き続ける。学僧でも僧正でもなく、一遍路の身を選び、生涯巡礼の一信徒として日本全国を歩き、先々で相当数の木喰仏を彫っている。柳も1924年以降、旅から旅へ、甲州、佐渡、栃木、愛知、静岡、新潟、九州各地、四国各地、信州、山口から鳥取など、帰洛してもほんの数日、というありさまで追いかけていたのである。この間、それぞれの地で、荒れ果てた祠のなかでひっそりと佇む像に触れあい、人びとの日常の営みのそばにいつもある仏の姿を、柳は目に焼き付けていく。行く先々で発見される仏体と遺墨は、日本でも特に不便で人を寄せ付けなような場所にある。山の上、たとえば佐渡の雪に閉ざされた金剛山に寒三十日の日参し供養の業をおこなったことなど（柳1925c：7：385）、彼は上人のひとつひとつの足跡を明らかにしていった。

木喰上人は僧籍からすると真言宗の僧だったが、彼は宗派にこだわることはしなかった。「詣でる寺々も決して真言の一宗には限らない。禪刹も阿弥陀堂も彼の足を招いている。神社もまた彼の敬念を集めた。神仏は一体であった。彼の納札に彼は「靈仏靈社日本順国」と書いた」（柳1924b：7：33）。土人は行くところお堂と木喰仏をつくるのだが、わずかばかりの滞在の間にも

上人を慕うもの信じるもの多く集まったことを察するに、上人の性格や信仰には異常な力があつたに違いない。しかし、彼は自分のした仕事のその後については無関心であった。どんなに感謝されようと、すぐに旅の修行僧に戻り一つの所に止まらないのである。「信心は単一である。煩雑な疑念は宗教を遠ざける。単純の深さが信徒の住む世界である。単純は粗雑ではなく、無心は無知ではない。(中略)単純への復帰、若しもこれが現代芸術の目途であるなら、彼の彫刻が現代に寄与するところは大きいであろう」(柳1914a:7:104)。柳は土人の、素朴で単純だが何ものをも包摂し、おおらかで喜悦に満ちた彫刻を、時代を超えて評価にたえうるものと賛美している。木喰仏と上人の生き方が、柳に与えたものは甚大であった。

微笑みに於て仏は私達に親しむ。彼らは遠い彼岸にあるのではない。この世の岸邊を私達の間さまざまに歩いてくれる。・・・民衆が上人の選んだ友達である。誰か秘仏として彼等を厨子の奥深くに封じるものがある。彼の作は路傍に立つ祠に置かれなければならぬ。それは私達に話しかける。私達を離れるにしては、あまりに人間である。・・・それらは皆此世の福祉ある所有である。一般民衆の親しい所有である。善男善女の典型がそこに写されている。仏は誰をも彼の親しい相手とする。仏は寺を出て街に歩み村に来る。彼は教理を解きはしない。彼は知識を待ちはしない。彼の交わりはもっとちかである。(柳1924b:7:106)

木喰上人の生き方や木喰仏を語るこの表現はそのまま、その後の民芸の発見に引き継がれていくことがわかる。木喰研究は、柳が民衆とともにある芸術の具体性にたいして認識を深めていく、重要な経験であった。また、それだけではなく、柳のこの全国にわたる木喰上人の調査は、上人についての雑誌への執筆も功を奏し、柳はこの調査に協力してくれる友を全国に見出すことになった。1925年には「上人研究会」が組織され、「共同の驚異と情熱」(柳1925b:7:391)によって結ばれた仲間を得たのである。そしてこの協力について柳は大いに力づけられる。「多くの友は此発見を私の力に帰する。だが、決してそうではない。私はかかる研究に向かっては何等専門的教養を持たない。私はただ私に与えられた驚愕において、彼を世に伝えたにすぎない。(中略)私は来るべき正しい理解者の為に、最初の出発を準備するに過ぎない。もしこの準備がひとつの美の門を開く鍵ともなるなら幸いである」(柳1925b:7:391)。前述したように、美とは柳にとってあらゆる立場や主義を超えた直観によって把握される感情であり、それは民衆の生活に深く交わり、その共同性を担保するものであった。上人研究会は、やがて柳が全国的に展開することになる民芸研究への、心強い足がかりだったともいえるだろう。

木喰上人という異常な精力と健康を持った生ける菩薩の足跡が、文字通り日本全土にまたがっていたことが、柳宗悦およびその周辺の工芸家たちにとっては、幸福だった。なぜなら、木喰上人の足跡が日本全土にまたがっていたという時、私たちはそれがいわゆる都会にはほとんど関係がなく、もっぱら村落から村落への足取りだったからである。つまり柳宗悦は木喰上人の跡に導かれるようにして、日本各地のいまだ文明開化や功利主義、時流追隨の習癖に冒されていない生活工芸品の生産と使用の実態に、次々に触れてゆくことができたのである。(大岡1981:639)

のちに民芸運動の中心的な担い手のひとりとなる河井寛次郎が、柳宗悦にはじめて出会い意気投合したのも、京都の柳邸に彼の収集した木喰仏を見たからであった。1924年4月に濱田庄司を介して二人は出会うが、その月末には柳の調査に河井も同行するほどだった。柳の精力的な活動は、1925年の春に朝鮮民族美術館にて木喰仏展覧会を開催するまでにこぎつけ、さらにその活動は継続されていた。そしてこの年の末、やはり木喰仏調査のため紀州を旅していた柳、河合、濱田は、その車中で「民芸」という新しい造語を生んだのである。彼らの木喰仏調査旅行は、同時

に民芸についての白熱した論議の場にもなり、実際に民芸収集も徐々に始められた。「日本民芸美術館設立趣意書」が書かれたのは、1926年であった。

柳にとって日本とは何だったのか。これに答えるのは至難である。彼は制度や概念を信じていないからである。ただ、柳も彼の同時代人と同じく、日本の伝統とか日本の文化的特質という言葉を使わないわけにはいかなかった。

たとえば、『手仕事の日本』で柳は「日本の文化の大きな基礎」について語り、その重要な二本柱として自然と歴史を挙げている（柳1948:11:11-16）。もっとも柳にとって文化の基礎とは、日本であろうと朝鮮であろうと、この二つである。さて、その日本に特徴的な自然とは何かといえば、島、岬、港、町、山、川、平野、湖水、などの複雑な地形と、それぞれに固有の多様な自然が存することを述べ、しかも北から南まで見渡せば、場所それぞれに風土に特有の変化があることを記すのである。つまり柳に言わせれば、日本とは多様性そのものなのだ。また、歴史とは何かといえば、先達たちが各々の自然のなかで知恵や経験を積み重ねてきた結果としての生活のことなのであって、それは具体的にはそれぞれの歴史と生活の形があるということに帰する。だから柳が「日本的なものを育てるべき」とか、「伝統は国家の財産である」とかいうとき（柳1948:11:18）、それは、息づいた生活の多様なありようにたいする深い共感を大事にしたいという気持ちを表明しているのであり、日本という言葉に特定の統一的な内容があるわけではない。実際この作品の中では、上記の記述に引き続き、日本の各地方に伝統的に使われている品物の数々を紹介し、多様な地方の生活文化と品物についての詳細な記述が綴られているのである。（中江2009）

柳は、日本の文化や歴史を特定の内容で単純化し主張することは決して無かった。とはいえ、日本は多様だという抽象的な整理でまとめて事を終わらせることも無かった。木喰上人が日本津々浦々に旅をしながら、どのような場所においても人びとに無心の祈りとその喜びを与えたように、柳は、無名の人びとが無心に生み出す生活用品のなかに時代を超える美を見出し、そのひとつひとつに驚嘆しつつその様々な出会いを喜んだ。私たちは具体的な身体とその感性なしには生きられない、ブレイク研究から抱き続けた哲学を、柳は忘れなかったからである。そして、柳の石窟庵の体験は、木喰仏の発見を導いた。そして木喰仏への想像力は、柳に民芸を引き寄せたのである。

V. 相互理解への往復運動—不確かなものの世界で

柳にとってあらゆる生命はその具象性を抜きには存在しえない。生命は必然的に具象的生命なのであり、実存の経験主体もまた具象的存在なのである。だからこそ、近代的思考や政治が「客観」という旗頭のもと押し付ける概念や抽象性によって、具象的生命が傷つけられることに警戒していた。いや、敵意すら抱いていただろう。柳にとって戦争とは、まさに政治的に客観性をまとった抽象的理念の暴力が一つ一つの具象的生命を奪うことだったからである。そして、柳にとって、具象的生命を傷つけない抽象なるものがあるなら、それこそが芸術であった。

しかしすぐにわかることは、具象性を抜きに生命はないといいつつも、そこには大きな限界もまた立ちをはかっている。つまり、人間が目の前の具体性／具象性に接近すればするほど、その認識可能な世界は閉じてしまいがちであることである。それでも柳は、具体性を思考の背後に置くことはなかった。具体性の限界と比べるなら、客観という抽象的概念に潜むかもしれない欺瞞のほうが、はるかに有害であるからである。目の前の生命に接近しながら、その世界

を閉じないこと。柳はこの困難な課題に挑むことになったと考えることができる。

おそらくその方法は最低でも2つあった。

ひとつは、目の前の具体的な文化の探求を深め、具体性を突き抜けることである。柳の身近には「朝鮮の土になった日本人」として朝鮮の人々から敬愛を集めた浅川巧のような生き方があった。彼は浅川巧が亡くなった際に「彼のように鮮人の心に内から住める人がどこにあらうか。浅川は寧ろ鮮人の心で生きていたのである」(柳1934:6:638)、とその代替不能な功績をたたえ、損失を深く悲しんだ。また柳は、柳田國男や有賀喜左衛門との交流でもよく知られているが、やがて二人とも柳とは別々の道を歩むことになる。柳田は民俗学へ、そして有賀は農村社会学という学問に歩みながら、文化に内在しつつ理解することの深さと重要性に気づいた二人は、それぞれの地域に根を下ろして研究をすることになる。(竹内1999、柳・柳田1940:10:735-747)。これらを振り返ると、柳のなかに、異文化に根を下ろしてはじめて理解できるものの深さへの尊敬があり、その深さは、生命の具体性の限界を超える可能性があるという考えがあったことは、たしかに見て取れる。しかし柳はその方法をとらなかった。

柳の立ち位置は、むしろ、あまりに身近であるがゆえに生活者たち自身が気づかない文化の基層を発見することであった。生活そのものを支えている文化は、そこで実体的に生きている人間には対自化できないものなのだ。朝鮮文化における白磁の発見、楽の茶碗に対する井戸茶碗の発見、など、柳の発見のひとつひとつは、文化の中に在って認識できなかったものへの気づきであった。しかし、それにしても、内在している者がわからないものを、外在している者がわかるのだろうか。柳にとっても、それは否であったらう。それらは双方ともが実体に至る異なる道筋である。真実とか実体とか、それらは正しいものが一つだけがあるのではなく、様々な方向から見える姿を真摯に総合的につかんでいくほかない。

目の前の生命の具体性・具象性に接近しながらその世界を閉じない、もう一つの方法とは何か。それは柳に特徴的な二つの姿勢のなかに現れる。

特徴のひとつは、彼がこだわった「直観」という方法である。これは前述したように抽象性や知の突出によってももの見方が乱されないための方法であった。柳の父親代わりであった嘉納治五郎が、精力善用といったもの一体育(体感の育成)・智育(知識と技術の育成)・德育(共同性の育成)の、総合的にバランスが取れた人間の力の活用一が、柳のなかに自然に備わっていたのかもしれない。この人間力から導き出される知覚すなわち「直観」によって、真摯に対象に総合的に向き合うことが可能になり、しかもそれは一瞬なのだ。とはいっても、柳は自らの「直観」に奢ることはなかった。彼は直観した対象にむしろ遜る。柳は常に外来者の立ち位置を貫きながらも、他なるものに接近し感動し賛美しようとする。言い換えれば、他なるものを支配するためではなく、むしろ崇拜すべき美として被支配されるべく他なるものに接近するのである¹。この態度こそが柳にとって、多様な世界の共存には必要であった。

柳に特徴的な姿勢のもうひとつは、彼の動き回る好奇心であろう。柳のたどった道筋を大まかに振り返ってみると、その自由な想念は、まずブレイク哲学に向かい、次に朝鮮の文化を柳なりに感得し、さらに日本の自然とその芸術へと向かった。もとより柳のもつ教養は古今東西にわたり広く深いものではあった。しかしここで重要なのは、驚きと感動をもって他なるものを発見し、そのことが、自らのそばにある当たり前の世界の再発見へと導かれる、という、理

¹ 沖縄の民芸と言語の保護活動にたいし激しい社会的批判にさらされた柳は、以下のように、沖縄を崇拜することを通じて行った活動がまだ不完全な部分が多々あったとしてもそのことで沖縄を傷つけてはいない、と確信している。「吾々のこれまでやった仕事は、沖縄に対して悪かったであろうかと。さう思うとき、よし吾々は力の足りない部分はあったにしても、沖縄を毒するところで断じてないという、確固たる信念を幸福にも持ち得ることができるのだ。」(柳1940:15:175)

解の往復運動である。他者と自己との往復運動と言い換えても良い。不確かなものの世界のなかで、他者と向き合い自己と向き合うことの積み重ねを通じて、それぞれの個別性と共感可能性、その双方への認識を深めていく営みがここにある。「此石仏寺において、朝鮮は永遠の榮譽を示し、更に尚人間の底知れない深さを現じつつあるのである」(柳1919b:6:142)というときと、「私たちはいかに長く『見よ、ここに日本の偉大な仏徒があり彫刻家がある』と、そう云い得る日を心待ちにしていたでせう。(中略)私は貴方の名がやがては日本の海を越えて理解ある地上の凡ての人に認知される時が来ることを信じています」(柳1924a:7:281)というとき、これら朝鮮と日本にかんする述懐は互いに呼応しながら、その運動を通じて、柳は両方の文化の真実により接近しているのだ。もちろん多様なものの衝突は面倒だし、普通なら避けて通りたくなることもあるだろうが、柳は勝海舟のごとく、これにも憶病にはならなかった。「他力とは何であるか、全てなる自己を他に見出す謂である。自力とは何であるか、全てなる他を自己に見出すのである。それは唯一の真理を捕へる左右の手である」(柳1919a:2:130)。

近代社会以降の私たちは、「自力」を頼みにして戦うことには慣らされているが、「他力」を頼みにすることには慣れていない。柳から見れば私たちは、「真実を捕らえる左右の手」の一方を、時代とともに失いつつあるのだともいえるだろう。それも一つの理由だろうか、柳は後年になって、一遍上人の研究をしている。一遍は布教の旅の途中、南無阿弥陀仏の札を拒否される経験を繰り返す。「信のないものに南無阿弥陀仏の札を配ることは意味の無いことだろうかという一遍の問いに、その夜夢枕に立った熊野権現様はこういった『信不信をえらばず、浄不浄をえらばず、その札を配るべし』」(柳1955:19:524)。自力をもって他者を理解しようとしたり理解させようとしたりすることは、それは暴力である。他力を信じて理解への道が開かれることを待たなければならない。

他力本願とは、直ちには予定調和にならない世界を受け止める力のことである。そして、予定調和にならない世界で、他者に投げかけられる想像力の漂流、ないし多様な好奇心の往復運動は、避けられない運命である。とはいえ柳は、この運命を悲観するどころかどこまでも肯定しており、むしろそこにこそ、希望をもっているのだ。「想像は人間の永遠な肉体である」(柳1914b:4:308)という言葉があるが、想像の交換と寛容こそ、相互理解への遠い道筋となるのであろう。

「東洋は結合しなければならぬ、然し結合と征服による統一とを混同してはならぬ。個性と個性との互いの認許によって、敬念と理解と愛情とが湧くのだ」(柳1922a:6:21)。

参考文献

- 大岡信 (1981) 「木喰発見の意味するもの」『柳宗悦全集第7巻』筑摩書房
 勝海舟 (1983) 巖本善治編『新訂海舟座談』岩波文庫
 嘉納治五郎 (1988) 「柔道家としての嘉納治五郎」、講道館『嘉納治五郎体系』第10巻、本の友社
 韓永大 (2008) 『柳宗悦と朝鮮 自由と芸術への献身』明石書店
 佐藤光 (2015) 『柳宗悦とウィリアム・ブレイク 漂流する「肯定の思想」』東京大学出版会
 竹内均 (1999) 「民藝と民具のあいだ」『柳宗悦・民藝・社会理論』明石書店
 中江桂子 (2009) 「柳宗悦<民藝>というまなざし—ヘゲモニーへの挑戦の軌跡」『国際行動学
 研究』第4号、国際行動学会
 —— (2016) 「工芸家たちの『もうひとつの近代』—国境を越えた文化活動の記録として」、奥野・

- 中江編『メディアと文化の日韓関係』新曜社
 水尾比呂志 (2004)『評伝柳宗悦』ちくま学芸文庫
 武者小路実篤 (1912)「個性に就いての雑感」『白樺』第3巻10号
 柳宗悦 (1911)「科学と人生」全集第1巻
 【全集=柳宗悦 (1980-1983)『柳宗悦全集』筑摩書房 ※柳のこの全集からの本文中の引用については、柳 (作品の初出年) : 全集の巻号 : 頁、との表記とする。】
- (1913)「生命の問題」全集第1巻
 - (1914a)「我孫子から通信第一」全集第1巻
 - (1914b)「キリアム・ブレーク」全集第4巻
 - (1915)「我孫子から通信第二」全集第1巻
 - (1917)「柳猶悦小伝」全集第1巻
 - (1919a)「宗教とその真理」全集第2巻
 - (1919b)「石仏寺の彫刻に就て」全集第6巻
 - (1921)「宗教的奇蹟」全集第2巻
 - (1922a)「朝鮮とその芸術」全集第6巻
 - (1922b)「朝鮮の美術」全集第6巻
 - (1924a)「上人の靈に告ぐ」全集第7巻
 - (1924b)「木喰五行上人の研究」全集第7巻
 - (1924c)「木喰上人略伝」全集第7巻
 - (1925a)「上人発見の縁起に就て」全集第7巻
 - (1925b)「木喰上人の遺跡を全国に調査して」全集第7巻
 - (1925c)「木喰上人之研究六号雑記」全集第7巻
 - (1934)「浅川のこと」全集第6巻
 - (1940)「沖縄問題に関する所信」全集15巻
 - (1948)「手仕事の日本」全集11巻
 - (1955)「一遍上人」全集第19巻
 - 柳田國男 (1940)「民藝と民俗学の問題」全集第10巻
- 柳宗悦 (1975)『柳宗悦集』近代日本思想体系24、筑摩書房
 柳宗玄 (1981)「手賀沼の畔の思索者」全集第2巻